

尾瀬めぐり【1】 特に尾瀬へ行く人々の為に

自然は人生を語る

1 尾瀬沼は呼ぶ

「沼山展望」

檜枝岐温泉観光協会提供



画

尾瀬の湖と

山と樹

自然は人生を語る
 驚しき人魂の世界に於て私た
 ちは多くの人魂の姿を見ることが
 できる。
 迫られてくる煩悩、迫られて
 行く苦悶、眩惑されてゆく焦燥
 そして生と死の切縁に於て私た
 ちは其處に淋漓として流れ出づ
 る赤き血と汗、飲かれてゆく黒
 き肉とパンの香り、私たちはさ

尾瀬めぐり【1】

特に尾瀬へ行く人々の為に



南會の神秘境

る探を

文 書
 小 林 金 次 郎
 大 田 熊 三

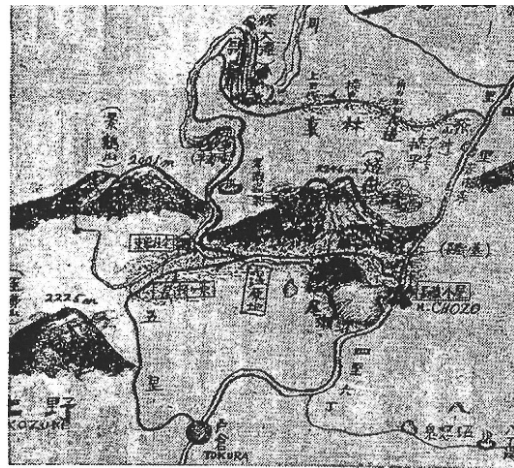
うした苦悶の中をあらゆる力を
 絞めしつゝ行かうとする、行か
 ねばならない。
 然しその私たちの悲劇と哀愁
 と憂鬱とを眞に深いメスを以て
 きり裂き、その深淵するどす黒
 い眼の血を取出してくれる人が
 一瞬幾人居るであらうか。社會
 には水晶の如く透明にしてしか
 も花の様に美しい翁がある。
 だから人魂の眼は酔はされて
 ゆく、この色に惑はされてゆく。
 私たちは多くの悲しみを抱つ
 たまま、到底一生涙流してゆく
 ことは出来ない筈である。
 然らばさうした暗黒な世界を
 突き破つてくれるものは無いの
 であらうか。
 然し神は興へてゐる、自然と
 いふ偉大な価値を興へてゐる、
 自然こそは「来るものため」
 用ゆる暗示を許し、用ゆる解決
 を興へてくれるのである。自然
 には暗示が無い、自然は元から
 あの餘り氣のないひき出しの姿
 で無言の暗示を興へる。自然の
 眼へ行くことにより私たちは
 どれ程力強く興へてくること
 がひき出るであらうか。小つぽけ
 な埃だらけの中に燃つてゐる赤

しき人々は一度自然の中へ飛び
 込まねばならない。山は語り、
 沼は興ひ、鳥はまねき、花はな
 ぐさむ。
 自然の上に安々と寝ころぶこ
 とにより、すべての重い落涙は
 消えてゆくであらう。
 自然は来る人に對して何にを
 かしら興へる、興へるゝもの
 は何か。それは凡ゆる人魂によ
 づて凡ゆる興つたものがある。
 人魂はその自然が無言のまま、突
 き出してくれるその暗示によつ
 て自らその暗示されたものの
 内容を知らなければならない。
 自然の眼へ興へて行つてもさ
 うした自らの力がなければやつ
 ぱりその人は其儘の人に過ぎな
 い、山が偉大な力を有するとい
 ふことは結局はその人間が如
 何に山の暗示を理解し得たかと
 いふ點にあるのである。
 南會津の山を一度歩みて、そ
 して尾瀬へ下るとき、會津駒ケ
 岳に登りて雪を食べつゝ万年雪
 をかきりつゝ下界邊に眺めつゝ
 お花畑を散歩するとき、人々は
 始めて雲の中にすむ仙人の氣持
 と會得する事ができるであらう

俗に「尾瀬」山尾瀬」といふ
 のは尾瀬を指してゐるしかし尾
 瀬といふ言葉の内容は既に尾瀬
 沼のみを意味するのではない、
 尾瀬といふのは全長東西五里に
 渡る廣大な面積があり、やゝ中
 腹に孤山と嵯峨とが相對し
 て南北に十字にこれを切つてゐ
 るので、尾瀬はその一部に過ぎ
 ない。この邊り一帯は湿地であ
 り、沼澤の上を歩む如くしや
 くとしてゐる、この湿地に種
 物が無數に繁殖してゐることに
 高山植物が一處に咲き亂れ、鶯
 が鳴き出すときは至る心も天に
 奪はれてしまふのである。
 尾瀬沼へ来るには色々の路があ
 る。一番利用されてゐるのは
 日光方面から――入丁湯温泉
 東郷沼方面より沼田方面から
 一 鐵田、戸倉方面より
 一番利用されてゐないのは鶴島
 方面から行く道である。
 田島方面から檜枝岐村より行
 くのである、この道は縣道にも
 ないといつて居る道程としても
 約四里、大したつらいわけでは
 ないが残念ながら利用する人が
 殆どない。
 カット 尾瀬の湖と山と樹

尾瀬めぐり【2】 特に尾瀬へ行く人々の為に

「尾瀬めぐり要図」



南會の神秘境

尾瀬めぐり【3】

文 小林金次郎
書 熊田 大三

る探を

その第一原因は交通不便がその主原因となるものであるが、間もなく梓木峠までは若松、田島から自動車が行き来するようになったから非常に便利なコースとなるわけである。殊に前述の梓木峠の特設道路を研究しつつ、山麓なる御津崎、お花畑に遊び、尾瀬へ足を向けるならばこれほど愉快な味深い旅はないと思ふ。俗にされた日光や華嚴は今や現代人の興味から大衆に愛されられてゆく。寒さ沼のちつぽけな沼は尾瀬にはない。さうすれば現に人の感

尾瀬を全く満足させてくれる興味の世に、御津崎、お花畑、梓木峠、尾瀬湖、尾瀬平、至佛山、世平、三丈大滝などになつてゆくわけである。俗界を離れた奥の自然美の世界である南會津の地方はさうした人々を惹きつけてはしない。かゝる旅を待つ南會津の人々これを語るべき南會津の人々はアルプスや富士の既によく知られた山を捨て、この地へ第一に足を踏み入れる必要があると思ふ。尾瀬に生息する人々は富士や奥山を離る前に先づ南

2 尾瀬の花園

南會津の神秘境を語ることを以て自慢としなければならぬと思ふ。尾瀬の各山はもとや征伐される所まで征伐された、次は南會津だ、尾瀬の學生も今度には群たもの方によつて、これを征伐してこれを尾瀬のものとして見て貰ひたい、それはそれとして尾瀬を一日も早く我々の手に取り戻したい。

2 尾瀬の花園

上つて登迎してゐる。こゝに特別したいのは「長葉のモウセンゴケ」であるが、これは星大先生が明治三十二年八月六日これを発見した、ところが同じ頃北海道大の河山農學士が八月十二日にエトロフ島のアイヤ山よりこれを発見して「長葉のモウセンゴケ」と命名されたものである。故に発見に於ては既に星先生が先がけとしたわけである、先生は後これを師範学校の根本先生に提供することにより植物學雜誌へ發表されたが、これよりこの植物が世人の注目になったものである。

これらの草花がさぞ立ち籠める大丘の上には千姿萬態に咲き散れ四方の山々の白き峰の森とハーモニとして、いよく陽も西に落ちんとして山の端を遠く、沼も風も静かなくして沈むとき鳴きいづる鳥の聲に包まれては如何に無情なる人々も感慨無量なるものがあらう。

華嚴で死んだと言ふ「藤村」は尾瀬に密に其處を巡れて、この尾瀬の邊りをさまよひつゝ人生のために涙したとか、かつて落人となられ給へる高倉喜仁王も寸時脚を止めてこの沼のはとりに立ちて浮き沈む人間の運命の上に落つる涙の袖を濡みなかつたとか。

心寂しきもの、現さびれたるもの、意志鬱鬱せるもの、世を嘆ひ世を悔めるもの、さうした多くの傷ける人々はこの世界を見ることにより如何にのうとするであらう。

人懐しげに寒まり寄る魚族は私たちの手の上に来て驚き、鳴く鳥は私たちのゆく手の端の中に或は灯をつける窓の側に来て暮れゆかんとして迫る沼の上の白き風に思ひ出づる旅愁をなぐさめるのである。(前掲地圖は小林作) 正誤前回最後の五行目「この道は縣道にもないといつて居り」は「この道は縣道にもなつて居り」の誤り

3 長蔵小屋

画

静かなる

長蔵小屋

「長蔵小屋」

檜枝岐温泉観光協会
提供



尾瀬にうたふ

写真

尾瀬沼の仙人

平野長蔵 翁

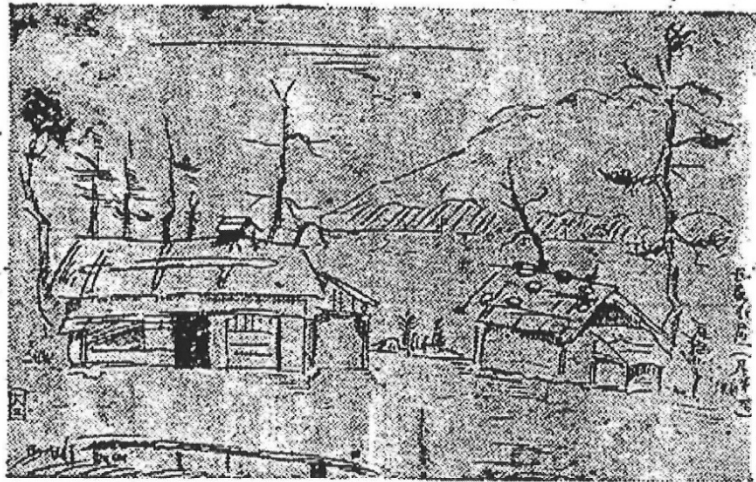
「沼尻の鳥居」

檜枝岐温泉観光協会
提供



3 長蔵小屋
この尾瀬の仙人と言はれた平野長蔵氏は昭和五年八月二日

尾瀬めぐり【3】



南會の神秘境

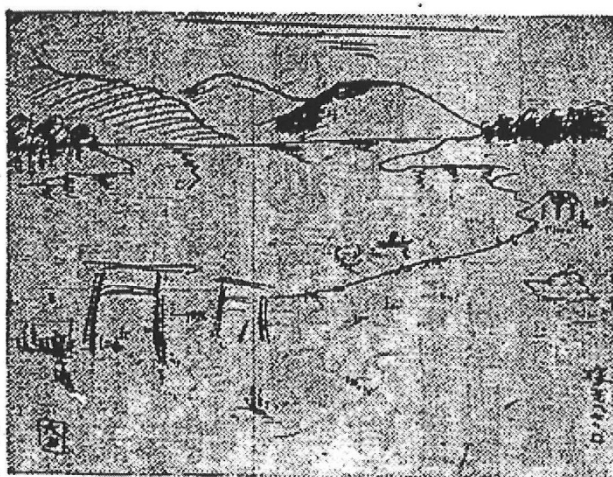
る探を境

文 書
小 林 金 次 郎
大 田 熊 三



傳である檜枝岐村を道はれてこの沼に降りて現今に至るまでこの尾瀬地方の開墾と天然植物である高山植物の保護のためにあらゆる力を傾注した人である。村の人々の最後の望みを託らんとして長蔵を受けて遂に沼の仙人となつた。

人となつた長蔵氏は今沼のほとりの小高い草の丘の上に寂かな眠りを静かにしてゐる。彼の生誕は地獄そのものの上には遠くに出すことはできない。然しながらこの大自然そのものの中に居る長蔵翁は四方の霧の中に大陸を上げるとき、寧ろゆく沼の水の上の霧か彼方を手こまねくとき忽然として白髪の間を現はすであらう。自然を愛し自然の中に入つて行つた長蔵氏の魂はたとへば沼のほとりに遊ぶ白鶴の姿と似てゐる。



小屋と云つても室は四ツ五ツもあると言ふこの深山には珍らしい。宵はランプが灯るが、キャンプする彼方の帳からは月明の夜を照して沼の上に照る。聲が響いてくる。今は長蔵の息子長英氏夫妻が父の遺志を繼いで探検してゐる若い直に燃えた飾り気のない素朴な良い若主人公である。長蔵氏は死んだが熱に燃れる長英氏がこれを繼いでゐるならば

この大自然の美は隠されてゆくであらう。この宿では普通に旅館の如く泊めてくれるし、自炊することでもできる小屋がある。キャンプする者は自由に物品の供給と仰がれるしほんとに便利である。ここでは馬も飼つてあつて荷物を運べる。又太極の狐が飼はれてゐたり、高山植物が澤山栽培されてゐる、今これを上げればイソムササキ、クロユリ

トガクシシロウマ、シラネアオイ、エゾリンダウ、シロハナノスミレサイシン、コマクサ、ミヤマウスユキサウ、(原名エーデルワイス) ヒメウメバチサウ、タカネバラ、タカネナデシコ、オサバグサ、ナンキンコザクラ、大サクラサウ、キバナノコマクサ、その他にも色々沼や山岳のものを集めてゐる。

・尾瀬にうたふ

小林 金次郎

絶え上る空のおもて一人くらくうなだるる風かたど灰色の尾を打ちふりつふと見上ぐる湖底の赤い眼波を追ふ波の後に低く長き生きものの叫ゆ。水を呼ぶ鶴はしらじら鶴を呼ぶ花はうすうす雲白の香り高くする野の末にあゝ恋はかすかにも見ゆひら ひら と草の葉の如く

8月16日 作

4 尾瀬沼の伝説

5 岩魚は沼の精

6 尾瀬ヶ原

南會の神秘境

尾瀬めぐり【4】

文 小林金次郎
書 熊田 大三

る探を境

4・尾瀬沼の傳説
迷の湖、神秘の森として古くから傳へられてゐるこの尾瀬沼には様々なる傳説がある。
然しこの傳説が果して眞であるか、否かは分らない、併し傳説はそれが何にせよ、其の地を永久に生かしてゆくためには眞偽はとがめる必要はないと思ふ。

其の昔、時は治承年間、後白河天皇の第二皇子「以仁王」は山城宇治の戦ひに敗れ、源賴政等を伴ひ吾妻を越えて遙かに越後へ赴き給ふとき供奉の一人である尾瀬大納言國は此の尾瀬の地を通りこゝを去るに忍びず遂に此の地に留つたといふ、それでこの地も尾瀬と稱したと傳へられ、その北岸には毎日の如く武を練つた跡がある。又この沼地の中には餘生を送つてゐる靈魂として水田の跡らしいものも残つてゐる。

又尾瀬大納言は常に赤色の牛を飼ふてゐる。好んで常にこれに乗つて沼のほとりに遊んでゐたが、この牛は或日何をも思つてか水の中に飛び込んで遂にかへらなかつたといふ。
このために大納言は非常に悲しまれたが、そのために若し牛がこの沼のほとりへ來れば必ず雨が降ると言ふ。又牛が死ぬといふ、これは涙の雨か。
それ故にこの廣き牧草の原には牛が一匹も飼はれない。
根柢五千四百九十尺の高地に、沼の如く平らかに湛さへも寝るがごとく寄せてくる尾瀬沼、周囲は約三里、水は青く澄んでこの上に鏡を倒に映した千古の秘雲を今尚物語らうとしない。浮草やちんさへは沼の波を静め、霧の中に浮ぶは柳と白鷺の膚、今また絶えへここに遊びに來るなどと思へば思ふのみで沼の麗しさを知らることができぬであらう。

ができるであらう。
明されぬ靈魂と或しを持ちて世を捨てんとする人あらばこの花崗へ來るべし、この花崗こそは必ずやその人々の行く手を靜かに指さして呉れるであらう。
東西二里、南北三里、四千六百二〇尺の高き地に草を愛で月を讀める者はたゞに「以仁王」のみではないであらう。

5・岩魚は沼の精

沼や湖にはよく主と稱して、白蛇とか、龍とか、大蛇とか、住む、この尾瀬沼には大きな岩魚の精が居る、今まで取れたものも最も大きなものは一貫六百匁あつたと云ふ。

今尾瀬小屋の入口には六百匁の巨物が黒光りに光つてゐる。
又沼には「どぜう」が居て長いのは八寸以上もあるといふ。ボヤは無数に居て沼で釣糸を垂れる人を倦かせない。

この沼、東西二十七町、南北十六町、全面積九百三十町歩の中に我が福島縣の部分は七百二十町歩に及んでゐる、この殆んど我らのものである、この天興を私たもは多くの人々に一日も早くに知らせたいものだと思ふてゐる。

6・尾瀬ヶ原

この爽しき沼と小山をへだてて

この原には浮島と言ふ不思議なる「根無し島」がある、これは氣まふ風のまゝに移動するもので、昨夜こゝにありと思へば今日はあすこゝ、今日はあすこゝと思へば何時か何處かへ移りゆくと言ふ。古き人々はこれを神の仕業なりとして恐れてゐた。又この邊りには「モリアオガヘル」と言ふ木の葉の上

に住む可憐な精が住んでゐる、これは常緑の木の葉の上に棲息してゐて別々水中には深き木葉の葉の上に大事に大事に静々と居る。

尾瀬ヶ原がある、これが問題となつてゐる花崗である。
一帯幾里かとさへ思はるゝ濕地は一面に高山の草々に被はれ、これが朝霧に包まれてゆくとき、そしてほの白き太陽の光に照る中に山鳥が鳴き出づるとき、風が深山のほの風を運びくるとき、この野は遂に天國の春となりて來る人の魂を驚かす。
霧の次第にうすれるとき、霞霞の花は神々しく匂ひ、一本一本と現はれ來る白樺のかげそき樹の梢にたまる水滴は靜かにも枯葉の上を打つ。又霧の奥よりは迷ふことく飛び出で、又霧の中に迷ひゆく名も知らぬ鳥も見え、その寂しくもかすかに打ふる翼の音さへ人を只憂き心の世界より聖地へ誘ひ呼ぶのである。
尾瀬沼の澄みたる水に魂を洗はれたる人々は再びこの尾瀬ヶ原の花崗の上に於て全く眠ること



「大下 藤次郎の碑」

檜枝岐温泉観光協会提供

画 大下画伯の碑

7 尾瀬と

大下 藤次郎画伯

8 燧ヶ嶽

写真 尾瀬の湿原

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁



「5 燧ヶ岳(組)」

檜枝岐温泉観光協会提供

7、尾瀬と大下藤次郎
大下画伯
尾瀬の霊光を眺ふものには、詩人あり、俳人あり、畫人がある、これらの藝術家はすべてこの霊なる天地の上に立つてこの尾瀬を眺めた。そしてその自然の美が何時か懐想となつてゆくのであつた、この尾瀬の地に一生を捧げたといふ考へた人の中に大下藤次郎畫伯がある。氏は遠くこの地へ行脚してより幾日となく沼のはたまりを巡遊しつ

つ絶えず尾瀬の靈光に呼びかけ、繪筆を執つて居られた。氏は何時かこの地を自らのものとさへするまでにその藝術家に近寄つて行つた。氏は「此沼のはたまりで死にたい」と言はれた。けれども熊田氏が死んだ地はこの花崗の上ではなかつた。然し喜びよる氏の靈を眞に知つてゐた長蔵小屋の主人平野長蔵氏は大下氏の空しき靈のために沼に向けて碑を建立したのである、この自然の花にも盛るべき

この路は前にも一寸書いた様に全く岩だらけの澤原へにゆくので大下氏の根氣の試練地であると言つても良いであらう。岩の堅、木の根を握りつゝ登りゆくのであるが、雨の降らぬ日にはできるならば靴はきの方が足指を痛めない、只こゝへ来るまでの沢地のため靴は水が濡れになつて了ふが――。

連山が見える。頂上の附近には石楠花と御へ

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

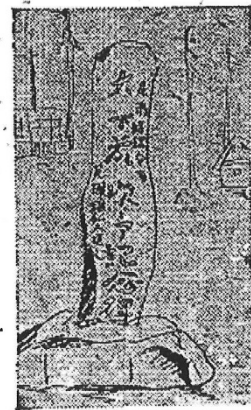
小林、愛子、又次翁

明治二十二年十月十九日建立と刻まれてゐる。これが八雲山

「5 燧ヶ岳(組)」

檜枝岐温泉観光協会提供

尾瀬めぐり



南會の神秘

る探を境

文 小林金次郎
書 熊田 大三

マナタグラ(七七三、三三)シ

バスグラ(七七八、八八)の二

湖を越えて湖の畔に、湖の出口に「沼尻」より一の鳥居、二

の鳥居をくぐり、花崗を五六丁

ゆけばよい、麓の登り口となる。

この路は前にも一寸書いた様に

全く岩だらけの澤原へにゆくので

大下氏の根氣の試練地であると言

つても良いであらう。岩の堅、木

の根を握りつゝ登りゆくのである

が、雨の降らぬ日にはできるなら

ば靴はきの方が足指を痛めない、

只こゝへ来るまでの沢地のため靴

は水が濡れになつて了ふが――。

連山が見える。頂上の附近には

石楠花と御へ

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

燧ヶ嶽

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

燧ヶ嶽

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

燧ヶ嶽

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

燧ヶ嶽

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

小林、愛子、又次翁

燧ヶ嶽頂上の記念撮影

神社と熊耳、熊田、

9 尾瀬と東電との闘ひ

南會の神秘

尾瀬めぐり【6】

文 小林金次郎
書 熊田 大三

る探を境

9・尾瀬と東電との闘ひ

美しき自然を護美しこれを永く傳へんとする者ある其の一面には、この美しき自然を破壊してまでも化學の動力を求めんとする者もある。

一つは尾瀬国立公園の建設運動であり、一つは東京電燈會社の企案である。

東電に對する尾瀬使用權は大正十二年認可されたものである、爾來東電はしきりに測量を進め、ボーリングを下して計畫は増々進展して行つた、けれども地圖の上には、おける南會津山中の湖は誰一人

顧みるものなかつた。眞に驚かしくない人々には如何にしてか尾瀬の風光を知るべき術もなかつたのである。斯て昭和二年には設計の變更も許可され小屋さへも造られて次第に手は廣がつてゆく、ボーリングといふのはダイヤモンドのついた鑿の管が岩石をえぐつてゆき地下の岩質を檢べる装置で、これによい「平滑湖」と「オノデリ」の間に於いては地下一五三尺から一五八尺中の岩石さへ採取され石の丸棒が東電の小屋に下けてある。

東電の調査によれば現代の尾瀬は恐らく三代目の湖であるといふ、地下約五百尺の底には又森林があり、底に腐れた木がとれるといふ、東電においては大瀧泉尾瀬ヶ原に尾瀬沼の水を入れて大貯水池を作りこれを群馬縣の方へ下して大動力を作らうと計畫してゐるのである。これが實現される際には花畑、觀ヶ原も皆樹の林もすべて水に被はれてしまふのである、花に替つて花に目ざむる小鳥や蟲たちも、やがて其營める巢を追はれねばならないであらう。

最近に至つて始めて尾瀬の眞美を知つた世人はこれを惜み、學者達の間にこれを認むるところとなり傍てこれを保護地とし國立公園となつたのである。然し東電が現在この地に手を下さないがために自然を破壊されはしないが、さるべく計畫されてゐる事實を見ると、うたゝ感慨無量なるものがある。

10・三丈大瀧

南會津の山奥に一人ぞうくと響きを立てるもの、三丈大瀧がある。

飛瀨は約二〇〇尺、其の雄大な流は、葉も及ばないであらう夏の國を受けてキラ／＼と光る水の玉、この玉を受けて聖者の行をなす大塊の苔岩、それらは皆きり立つ大岩壁に圍まれて深山の雲氣に、れそはつてゐる。沈黙のうちに此處に相對してゐる時は何時か憂愁の雲は立ち消えて「一切是空」の感が神々と身に迫るのを覺する。南會津を尋ね、尾瀬を知る人は又三丈の大瀧を見なければならぬ。

10 三丈大瀧